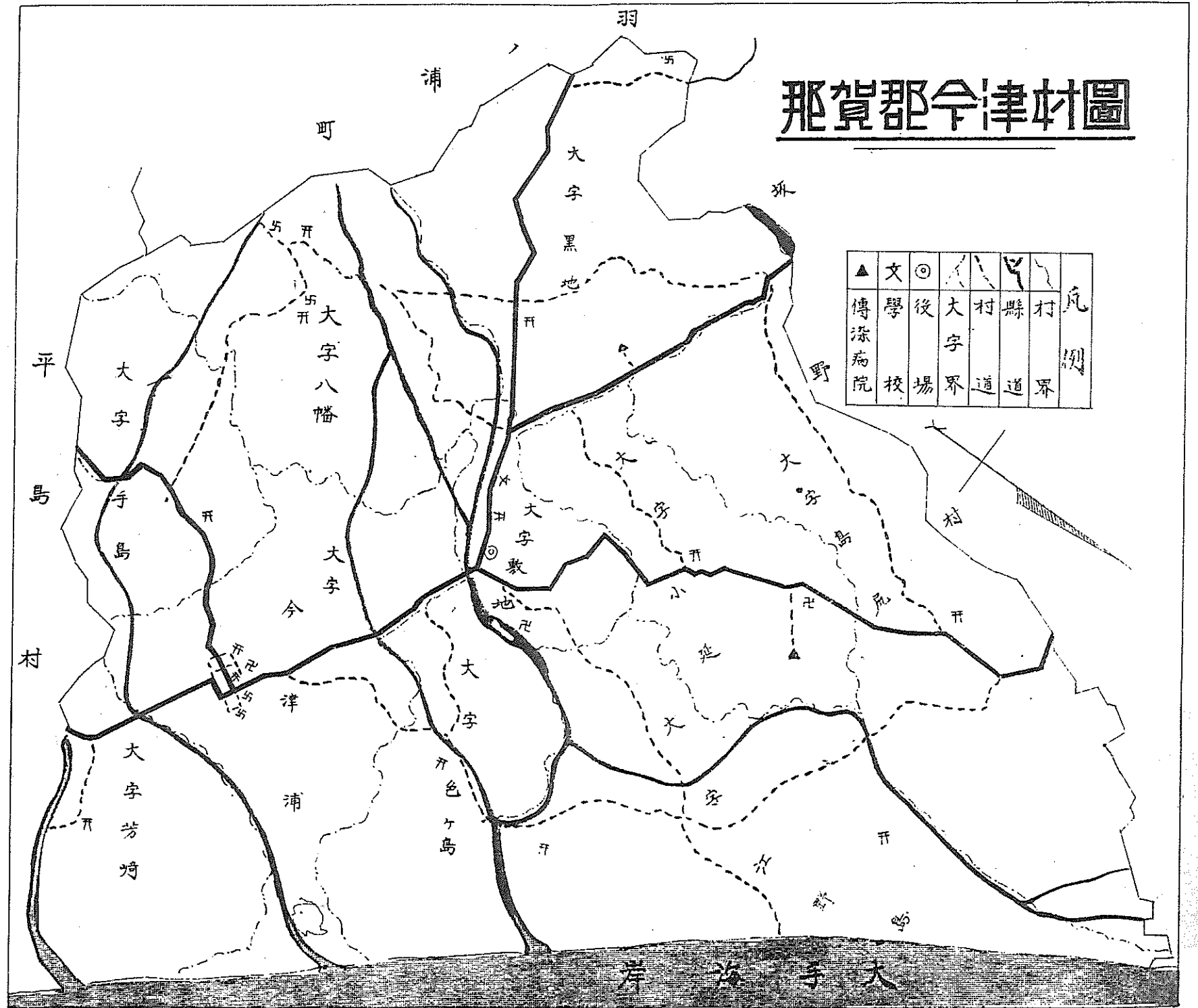


那賀郡今津村圖



大 飢 饉

昔から饑饉は毎々あつたが古くて餘りに知られん話は扱として天明の飢饉といへば天下廣くの大飢饉で鶴岡へ飢人が澤山乞食に入込んだ時の鈴木今右衛門夫婦と少女の慈善話で尋常小學校の三學年位の兒童であれば大抵知つた筈じやが昔の事なら凶事を忌んで其末寛政と改元なつた其時「てんめい(天明と天命の語路)は食うや食はずに

八九年もうこれからはくわんせい(寛政と食はんせとの語路)なり」といふ落首のあつたは今も古老の内には口に
して居る向もあるが當地の模様を知られたものは皆無である然るに夫より四十餘年の後で天保七八年度の大飢饉
は今となつて昆虫學上「ツマゴロコバへ」の害虫が發生した結果であると別つて來たが當時は何も知らん百姓
連は田島の上毛が皆無となつて貧民共は米の相場が壹石三百目したのに打撃を受けて木の實木の葉や草の根迄も
掘採り食うたは實に指齒相接した未開の世にもあるまいと思ふばかりの有様で唯に米價が高いに困つたばかりで
なしに錢を持つても容易に得られん位で郡代所の救助銀や地方富家の焚出し粥の與内もあつたが仲々送附がな
つた夫れで諸穀はだん／＼騰貴して天保八年丁酉夏の相場では新麥の打崩しが百六拾五匁皮着たまよの大麥が百
六拾五匁裸麥なら百八九十目出がらの琉球芋迄高かつた夫れで路傍の草迄奪合ひ食うて青い草といつては一莖も
なくなり海邊にはもづく、あをさの附いた石も皆箸り食はれて見えなくなり樗の實さへも七八十匁もした上に古
い藎にかちり附いて飢死したのもあつたは事實であつて今津浦の西森ヨシは當年取つて八十二歳であるが其
話に依ると其母ゲンより聞いた處では「米が三百目したので飢人が澤山出來て木の葉や草の根迄も食ひ盡して仕
舞には小便庭にかちり附いて死んだものもあれば魚の擔賣がつかれながらぶらつき歩く道で暖かな處へ來たら一
口眠つて休んで居る内其儘死んだもの等がだん／＼あつたといふことである此話は其時の實際を想察するに足る
べきもので此他は古老に聞いた處と吾人が嘗て調べ來つた處を綜合すると初に述べた處を斷片的に話されたに過
ぎんから多くは云はん

大 地 震

阿波國內で古い地震で名高いものは康安元年の大地震で海部郡由岐浦の地が裂けて長さ二百貳拾步其徑百歩の大
きな池となつたといふのが太平記に見えて居る以來のものに吉野朝廷時代の武家方後光嚴院の貞治二年全上後圓
融院の康暦二年江戸時代の慶長九年寶永四年の大きな地震もあつたが今津浦免許に任して以前は今津浦川口番所
の番人役を勤めて居つた舊家である森本嘉之太氏方に藏して居られる同家初代の十左衛門が手記した文書の中

に享保三年戊戌十月六日に郡所へ指出した地震の報告に

覺

一 壹間半に貳間之遠見御番所上にて五六寸ほど倒れ廻りて壁崩雨戸壹枚破損同所取合廊下鴨居落申候屋根破損
杜候

一 二間ニ四間ノ住家屋根破損仕申候

一 雪隠破損仕申候

右者私居申御番所一昨四月之地震ニ破損仕申候御注進を申上候右之趣被仰可被下候上

亥ノ十月六日

森 本 十 左 衛 門

常 右 衛 門 殿

茂 次 兵 衛 殿

と見て居る外寛政元年の地震もあつたが本村内には寶永以前の地震と共に文書に存する處もなければ口碑にも亦残つて居らん唯口碑に残つて今猶古老に恐れられて居るのは安政元年の大地震であつて江野島で八拾歳の高齡者武田廣吉翁の話を聞くに

私は僅か七ツの時でありましたから充分覺えて居りませんが西の方から大きな地鳴りがすると思ふと毎日々々内の家も隣の家もぐわたり／＼と大きな揺りがしましたが私は地震といふことも存じませすに何うしたことかと思つて居りますと家の軒が地に附くやうに見えまして屋根の瓦がぐらり／＼と落ちて來ましたいやもう恐ろしい事でありました其内土地が割れたら其割れ目に狭まれて揺り殺されるところでは敵へ逃げたら根柢がからんで居るから割れんといふので敵中へ逃げたといふのを聞きましたが私處のあたりでは地震が揺つたら津浪が來て家もなにもさらはれると八鎌しう云うていまして皆々逃げて行きますので何處へ行くとも知らずに母に連れられて行きます内に手は引かれて居つても足が揺られて歩けませんので脊中に負はれて行きましたのが中庄

の觀音山でありまして其處へは澤山人が逃げて行つて牛や馬やに米麥杯を附けて行つて居たもの澤山で暫く其處で居りましたが歸つて來ても矢張毎日小揺は長く續いて居りました

と八幡黒地色ヶ島今津浦本村内の村浦は大抵同處へ避難したといふのは古老の話で一致して居る

今津浦で八十二歳になる西森ヨシ刀自の話を聞くに

私は十になるかならんの年の冬の西の方に地鳴りするのも聞ききました又飛ぶ鳥も落ちるやうに思はれ家は倒れるやうに揺りましたので内には居れず父や母やと外へ逃げて出ましたが隣近所も皆々騒いで内に居るものとはありませなんだ其内沖の方がはでつて静かになつたと思つて居る内俄かに荒れて浪音が高くなつて來たので皆々大いに驚いて丈夫な男は年寄子供女を扶けて津浪が來ると何處へか逃げて行きましたが父は本名庄吉で綽名を蛭子と取つた位で南北仲間の者等に知られた氣丈夫な人物でありましたが申さずには「當所は昔から沖石權現さんが守つて御座るから氣遣ひない逃げるに及ばん津浪は來ん」と落附いて居ましたが浦邊の松原へ打上げた位で格別の事はありませなんだ夫れに此地震が仕出す前には沖へ出て居た船もありましたが沖石權現さんの神体となつて居る大石が引綱に引つかゝつて出て來た後に信行寺の石壇にしようと同寺へ昇いで送つてあつたら三晩も續けて住持へ夢で告げるには「我を沖の石權現と祝つ呉れたら津浪は來さよん」と仰せられたといふが津浪も來ねば海の荒れる前には權現さんが放螺貝を吹いてお知らせなつたので地震の時も權現さんの貝の音を皆々聞いて海へ出て居た漁師其他の船も歸れば凶事があると用心して船人は孰れも海へ出ななだので厄難に罹つたものがなかつたが今でも彼の時の事を思へば身の毛がよだつ心地がします

と話された其他の古老に聞いても大同小異で恐ろしかつた小便壺の小便がざぶ／＼外へ揺出されて歩けななだ家々には火事を恐れて火を消して皆々外へ逃げて出た觀音山或は敵へ避難したといふのが通有の話であつたが此地震は嘉永七年霜月四日を始として其月中は揺り續けて極月に入り漸く静かになつたので安政元年と改元なつた夫れで歴史上では安政元年の大地震として傳へられて居るのである